チョモランマ頂上からの世界初のテレビ生中継

講演 岩下 莞爾 氏

1988年テレビジョン学会全国大会の中日、7月21日15時30分より、東京理科大学記念講堂において、中国・ネパール・日本の3国友好登山隊のテレビ隊長をつとめられた岩下莞爾氏の特別講演が行われた。氏は本年5月5日、世界の最高峰8848mのチョモランマ（珠穆朗瑪峰＝エベレスト、ネパールではサガルマタ）からの生中継に成功し無事帰国された。ここにその内容の一部を紹介させていただきます。

編集幹事 富田良二（日本テレビ）

ご紹介いただきました日本テレビの岩下です。帰国後も何かと忙しく、チョモランマ中継についての私なりのまとめも手がついておりません。学会の特別講演として自信は全くありませんが、画を見ていただきながら、思いつくままに話をさせていただきます。

この計画は企画を考えてからちょうど8年になり、よく8年前というのは本当ですかと言われるのですが、私1975年にネパール側から日本の女子登山隊のエベレスト登山と一緒に رفتり、8年前の1980年に外国隊として初めて中国のチベット側からのチョモランマの記録をVTRで収録しましたが、その時には残念なことに高度差で90m程残して頂上からの大パノラマを撮ることができませんでした。その時、次は生中継だと思いました。それは地形的な理由で、ネパール側からは7～8日は人力による輸送に頼らなければなりません、中国側は5154mのベースキャンプまでトラック輸送ができ、素人なりに地形を見てインド洋上のインテルサット衛星が利用できることを感じて、結果的には頂上からのVTR収録ができなかった

岩下莞爾氏は、昭和10年、東京に生まれ、33年早稲田大学政経学部経済学科を卒業され、同年、日本テレビ放送網(株)に入社された。主にドキュメンタリー番組の制作を手がけられ、「日本人初の快挙・北極点に立つ」(1978年度芸術祭優秀賞など受賞)、「生と死に賭けた36時間!これがチョモランマだ」(1980年度テレビジョン技術振興放送番組技術賞・芸術祭優秀賞など受賞)などを制作し、今回日本テレビ35周年記念イベントの一つとして「チョモランマがそこにある!!」を制作された。

Lecture "The First Live Convergence in the World from the Top of CHOMOLONGMA" by Kanji Iwashita (Nippon Television Network Co., Tokyo)

ことが、今回の世界最高点からの360°のパノラマ生中継を衛星を利用して日本、中国、ネパールはもとよりアメリカのNBCを含めて各国に放送できたことにつながったと、私達にとっては幸せと思っています。

この中国・ネパール・日本の3国友好登山隊の目的は大きく2つで、①南北両側（中国側・チベット側）からの同時登頂と交差縦走、②現地からの衛星による初のテレビ生中継であり、名前も現地名のチョモランマ、サガルマタを使用しました。テレビ隊は何としてもこの登山の衛星生中継をやりたいということで、別動隊として3国友好登山隊(285名)の中の一つとして隊長以下40名で独立した行動ができたことが、成功につながったように思います。南北縦走隊と同時に頂上に登って、両側から登ってくる隊員の頂上でのランデブーを中継するという一つの目的があったのですが、実際には南側からの登山が遅れ、また、5月5日の朝は北側から日本、中国、ネパールの3名がスタートしましたが、テレビ隊は機材とか撮影条件などを考え、また、非常に風も強く2時間遅れとしたため3国の隊員たちの同時登頂を撮影することは難しいと判断し、とにかく頂上の360°のパノラマを撮るという目的に切り変えました。2時間遅れで中村(進)、中村(省)、三枝のテレビ隊の3名が登っていったのですがこれも非常に幸運というか、ややツキに近いのですが、直前まで雲が出ていて多分登っても殆ど見えないのではないかと思いますし、また実際に直後の下山風景も雲に隠れて見えませんでした。風が強いため第7キャンプ(8600m)で待機させたことが、結果として登頂時の好天気にも恵まれたことにつながりました。

隊員構成には非常に苦労しました。40名のうち約半数の22名が山は初めてで、技術を憶えてもらった

写真 1 ベースキャンプ風景

登山家に登頂してもらい、優秀な技術をもっている人はベースキャンプなどに配置するようテレビ隊の構成を考えました。

5月5日の頂上からの映像が本来のねらいでありましたが、1週間前ぐらいから放送できればと思っていました。ところが準備が進むに連れて、東京から矢のような催促で、なんと4月11日に最初の放送をするというかたちで、毎日、朝の「ズームイン朝!」、昼のワイド番組「おいッきりテレビ」、夕方の「NNN ニュース プラス1」、その後に特別番組というように丸1日の放送体制を組むことになり、殆ど仮眠状態で仕事を続けたわけです。

一番苦労したのは放送時間というもので、絶対に何月何日の何時に頂上に立てるというのではなく、それも5~6年前の企画書に5月5日と、山を知っている人であれば非常識なと思われることを書きまして、その勝手に現実になりましたのは、何というか自分達の努力とか技術の力とかを全く超越したものがあってできたような気がします。また、テレビ隊の約半数の22名は富士山も登ったこともない人達でしたが、一つの目的があればこんなに強いのかと驚くほど、高度に対してもかなり速く順応し、10日ぐらいで高度を感じさせない動きをしておりました。人間は順応がよいのですが、最後まで非常に恐い思いをしていたのは原因不明の機械の故障です。大型の発電機を2台持っていたのですが、1台が突然に故障して原因が分からずに最後まで1台で放送を乗りきり、もし止まったらと肝を冷やしたままでの放送でした。他の機器も故障しましたが、スペアでなんの支障もなく放送できました。登山というものは針1本でも重いという世界です。すから機器はより小型で軽くを優先しました。また、5月でも気温が -40°C となるので検討を重ね、いろいろ含めて4kgの重さで頂上にアタックできました。

写真 2 チョモランマ頂上1

酸素ボンベが大体7kg、限界が一人10kgなのですが3人の分担を考えて3人のテレビ隊だけのペースで登れたのが成功したと思います。

行く前から何と無謀なことをするんだろうとか、山の冒瀆だとか言われましたが、放送が終わりまして数にしては極く僅かですが、療養中の方や、身障者の方から良いものを見せていただいたというお手紙をいただきますと、やはり我々テレビマンとして見たいもへの、見せたいものをそのまま、あるがままに見せるという基本的考えは正しかったと思います。

最後になりますが、5月5日あの時間に晴れた条件で撮影できたのは、本当に大きなツキでしたけれども、人の熱意・努力とかがこのツキを呼んだのではないかと未だに思っています。確かに5月5日に世界一高いところからの映像と音声を放送したはずなのですが、未だに夢を見ているようで実感が湧いておりません。本当にそんな事があったのかなという感じです。

写真 3 チョモランマ頂上2